

## まえがき

本書『松蔭女子学院史料 第十集』には、恩師 Miss Leonora Edith Lea 著“WINDOW ON JAPAN”の翻訳を取めた。訳書名は、『私が愛した日本』とした。

原著“WINDOW ON JAPAN”は、1951年、ロンドンにおいてSPGから出版されたものである。

なお、本訳書には、ミス・リーが『八代斌助著作集 第一巻』に寄せられた序文を載せたほか、「あとがき」において、英語教師としてのリー先生の真骨頂を表すエピソードを被露し、数人の卒業生の寄稿を得て家庭教育者としての先生の姿を浮き彫りにする努力をした。

著者 Miss Leonora Edith Lea は、英国教会系の宣教団体 The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts (SPG) より、1927年、神戸の松蔭高等女学校に派遣されて来た方である。交換船に乗れず、太平洋戦争中ずっと日本に滞在するという過酷な体験をされ、戦後、日本聖公会総裁主教となられた八代斌助師のグローバルな活動を支えられた人物である。その働きは、『松蔭女子学院史料集』の第八集・第九集に詳しい。

その内容は多岐にわたり、第一部は、日本の気候風土に始まり、その歴史、日本古来の宗教としての神道と仏教、日本語ならびにその独特の表現様式、神道と仏教を前にしてのキリスト教、就中、日本政府の意向の絡んだ宗教政策のもとにおける日本聖公会の分裂、その苦難を乗り越えるうえでの中心人物となられた八代主教の活動が描写されている。

第二部においてその叙述は、絵画・彫刻・建築から、日本人の衣食住に、そして街の中の銭湯にまで及んでいる。ただ、一貫してその底流にあるものは、日本および日本人に対する深い愛情である。

ただ、本書の翻訳作業を通じて、私はやや意外な印象を持った。先生がお書

きになったものとしては、ミスプリントや思い違いとしか考えられない記述があまりにも多いと云うこと——これは、殺人的多忙の中でよくぞこのような書物を執筆されたということに対する賛辞と受け取っていただきたい——と、108ページのうち17ページを「日本聖公会総裁主教八代斌助師の生い立ち」に充てておられるなど、全体構成としてのバランスを失っているのではないかとの印象を持ったことである。八代主教について、もし同主教が国会議員に選ばれることを容認されていたら、もし同主教が総理大臣にでもなっておられたら、日本は大きな影響を受けていたのではないかと云った件<sup>くだり</sup>(162ページ)は、「言わずもがな」という印象を受ける。

もちろん、リー先生は、ただのリー先生ではない。いやしくも、本国のSPGより選りすぐられて神戸の「松蔭高等女学校」に派遣されてきた精鋭中の精鋭である。そのミス・リーが、任地神戸において経験された諸々の事象を、それも日本聖公会の存立にも関わる重大事件を歯に衣を着せることなく描写されている。それらの諸事象との運命的な出会いを、ご自身が受け取られたままに、そしてその思いをその筆致の赴くままに描写されるのには、なんびとたりとも、これを批判する権利はない。

また、翻って考えるに、如何なる組織・如何なる団体にあっても、そのトップに立つ人物の器量如何によって大発展もすれば凋落もすることを考えるとき、日本に派遣されたリー先生が、日本聖公会の逸材、将来のトップとして日本聖公会を率いていかれるに相応しい人物として八代主教に焦点を当て、この人物について詳述されたというのは正に的確にして、賢明な選択であったと云わねばなるまい。

教育宣教師として神戸松蔭に派遣された先生が、八代主教と運命的な出会いをされたこと、リー先生が報告の一端としての日本紹介に際して、戦時下の日本聖公会について如何に失望させられたこと、そして、戦後、総裁主教となられた八代主教が、日本聖公会の内部の方々のご自分に対するあらゆる形での攻撃、日本聖公会そのものに対する背信行為のすべてを許し、先方からではなく

ご自分の方から和解の手を差し伸べられ、相手の背信行為を一切責められることなく聖公会に受け入れられたこと、戦後初のランベス会議において、ご自分が先導された和解工作のすべてを含み、日本聖公会を去った主教たちを『「教区を持たない主教』として迎えたいという日本聖公会の決議書』をお持ちになったこと、カンタベリー大主教がそれを審議する委員会を設置され、その決議が総会において発表され、そして、大主教が、日本聖公会を祝福されたということが述べられている。決議書をお持ちになったというのが、具体的にそれはどのような文言のものであったのだろうか？ ただこれは、八代主教のご指示によりミス・リーがお書きになったものの筈である。その内容を知るミス・リーのような潔癖な方には、とても耐え難いことであつたのではないか。ミス・リーが口惜しさのあまり、唇を噛みながら「主教がおっしゃるので、私には、これ以上何も云えないのです」といったことを何度も云われるのが、私には余りにもよく分かるのである。この決議書は、具体的にはどのような文言のものであったのだろうか？ そもそも、「教区を持たない主教」などというのは、あくまでも事後措置にすぎないと思うのだが、これは和解を最優先された八代主教の発案である。ひょっとしたら、戦時下の日本で起こった日本聖公会の分裂騒動に関しては、「何もおっしゃらずに、このまま吞んで収めて下さい」という、八代主教の悲痛な願いが述べられていたのではないか。そして、特別委員会への大主教のお言葉として「あれほどの苦勞をされて、和解を得られた日本の八代主教の苦勞を汲んで、これを同主教の我々に対する陳情書と受け止めて、事を収めようではないか」という趣旨の言葉ではなかったか、と云うのは余りにも日本人的な私の発想であろうか？ しかし、“Compromise”(妥協)こそ最上の美德と考えるイギリス人なら、十分に考えられる処置であつたと云えないであろうか？

敗戦の翌年の1946年の11月から1948年3月までの僅か1年5ヵ月間ではあつたが、私は聖ミカエル国際学校の夜間英語コースにおいてリー先生から親しく英語の授業を受けた。英語もさることながら、戦後導入されたデモクラシーと

はどういうものかということ、身に染みて教わったように思う。それどころか、敗戦という人生最大の屈辱を経験し、どうしても投げやりになり勝ちな私たち日本人中学生に対して「あなた方がそのようなことで、これから先の日本はどうなるのですか！」とたしなめて下さったのを覚えている。

また、1956年の秋以来、数年間にわたり、松蔭高等学校において八代主教を職場の上司(松蔭女子学院理事長兼校長)としていただいた経験を持つ私は、八代主教の底知れないほどの度量の深さ、その寛容、悪く言えば、清濁併せ呑む同主教のご性格を知る者として、ミス・リーの、それこそ唇をかみながら、「主教様、そんなことでいいのですか?」といった、抑えきれない口惜しさが身に染みて分かる。『八代斌助著作集 第一巻』への序文のなかで、敢えて、大主教あての決議書の存在について触れられたのは、リー先生の大きな賭けではなかったか(232ページ)と云うのが私の率直な思いである。

本書訳出に際しては、極力、平易な表現を用いるように努めた。と云うより、先生のお声が聞こえて来るような緊張感をもってこの翻訳を続けた。ただ、先生の文章は平易に見えるようで決してそうではない。その日本理解も私など遠く及ばぬものがある先生の文章には含蓄の深いものがある。何しろ、2歳のときに駕籠に乗って旅行された経験があるというのだから恐れ入る。逆に、真面目に取り組んでいてふと気が付くと、リー先生独特の冗句と云うか、ユーモアに嵌められている自分を発見した。例えば、三十三間堂の、999,999体の等身大の仏像の話(168ページ)など、その典型と云えよう。むかし、「皆さん、ほんとに、生真面目ねえ」と云われたのを思い出す。最後に収録した卒業生の想い出の中に、結婚式の祝辞のなかで「新郎は、泥棒ねえ」と云われたという点など、その一例である。

文中、括弧を使って、先生の意図されるところを補充するように努めた。と云うより、教え子の特権を最大限に発揮させて戴いて、私は、「先生、こんな表現は如何でしょうか?」と云った示唆を行っていた。否、それどころか、ふと気が付くと、知らぬ間に先生と一緒にこの翻訳だけでなく、原著までを執

筆している共著者になりきっている自分を発見するのであった。例えば、日本の気象や災害についての描写(9ページ)の〔日本人は、これをサラリと『地震・雷・火事・親父』と表現しているのです〕という表現など原著のどこを探してもない。私の挿入である。思い上がった表現であるとは思いつつながら云わせていただくならば、私は、リー先生と混然一体となってこの翻訳作業を進めていた。

なお、本翻訳において私は、左に英文を右に邦文を配し、出来る限り左右対照に努めた。これは、原著理解の助けになったとは思いますが、それ以上に、拙訳に惑わされることなく、原著者ミス・リーのさわやかなタッチの名文を直接味わっていただきたいとの願いから出たものに他ならない。ただ、ある意味では、英和対照の形をとったことによって、思い切った意識が可能となったこともまた事実である。ただ、これは私の要望を最大限まで汲みとって下さり、私自身が驚くほど見事に、左右をピタリと合わせることに最後までお付き合い下さった河北印刷株式会社の皆様のお蔭である。この紙面を借りてお礼を申し上げる次第である。

神戸松蔭女子学院大学元学長 黒澤 一 晃